

離島の学びに火をつける ICT を活用した授業システムの創造

～My タブレットの活用と双方向型授業づくり～

キーワード タブレット 交流 合同授業 俳句

学校名 周防大島町立浮島小学校

所在地 〒742-2801
山口県周防大島町大字浮島205-1

ホームページ
アドレス

1. 研究の背景

本校は漁業を中心産業とした離島に位置し、児童数11名の極小規模校で複式学級を含め全3クラスである。従来から一人ひとりの教育的ニーズに対応したきめ細やかな教育活動を推進するため、タブレット端末(iPad)等も他校に先駆けて独自に整備し活用するなど、多くの教師がICTの活用を進めてきた。

本校の取り組みの影響を受け、周防大島町教育委員会もICT環境の整備を始め、28年度、各学校にタブレット端末や大型テレビを配備し、双方向型の授業づくりに向けてスタディネットやコラボノートも導入した。本校では、平成29年1月現在、2教室に大型テレビがあり、児童用タブレット端末9台が整備されている。これらのICTを教材の効果的な提示や焦点化、各自の思考をまとめたり発表したりするツールとして積極的に活用している。

しかしながら、通常学級に在籍する教育的ニーズの高い児童への支援を考えた時に、「いつでもどこでも使える」「必要なアプリのある」タブレット端末の環境を整えていく必要性を痛感している。また、離島においても日常的に他校の児童と積極的な交流ができる授業システムの構築に向け、条件整備が急務である。

2. 研究の目的

このような教育課題を有しているため、3台のタブレット端末の整備がすすめば、来年度全校児童が一人一台専用のタブレット端末「My タブレット」を持つ環境が整い、極小規模校において下記のような効果が期待できる。

- ① 自ら進んでドリル学習や家庭学習に取り組むことができる。
- ② 教育活動の中でタブレット端末を発表や意見交換時に効果的なツールとして使いこなす児童へと変容できる。

また、1台の大型テレビを整備することができれば、全学級において日常的な双方向型の授業システム環境が整い、離島の学校のハンディを次のように克服することできる。

- ① 他校との日常的な授業交流が可能となり、教員の授業の幅が広がり、ひいては児童の社会性の向上につながる。
- ② 児童が他校との交流を通して自信をもって自分の考えをまとめ表現できるような児童の姿も期待できる。

まさに、離島のデメリットをICTにより乗り越える可能性が開けてくるのである。

3. 研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
6月	I C T機器購入・整備	
6月 1日 (木)	I C Tを活用した3・4年複式指導について提案 授業<町教委訪問> (松岡教諭) 3年「円と球」 4年「わり算(1)」	指導案 協議録
9月15日 (金)	I C T活用に関わるアンケート調査	アンケート用紙
10月13日 (金)	橘・久賀地区SKS学習(集合学習)研究会 4年 国語「日本語のしらべ～秋～」(松岡教諭) 4校児童43名、参観者 約20名	指導案 授業参観用紙 コラボノート
10月19日 (木)	先進校視察(広島市立藤木小学校 竹田教諭) I C Tを活用した学習支援の在り方	研修復伝
11月28日 (火)	やまぐち総合教育支援センターサテライト研修 1年 国語(猿渡教諭)「曜日と日付を覚えよう」 指導者: やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事 中谷靖彦 「複式学級における主体的・対話的で深い学びを 実現する授業改善」	指導案・反省 講師資料
10月31日 (火)	やまぐち総合教育支援センターサテライト研修 5・6年複式 算数(河島教諭) 5年「単位量あたりの大きさ」6年「場合の数」 指導者: やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事 中谷靖彦	指導案・反省 講師資料
11月29日 (水)	先進校視察(萩市立佐々並小学校 松岡教諭) 文科省委託事業「人口減少社会におけるICTの活 用による教育の質の維持向上に係る実証事業」	研修復伝
12月 6日 (水)	I C T活用について情報交換	レジュメ
2月 7日 (水)	授業研究 5・6年理科(竹田教諭) 「発電と電気の利用」	指導案
2月15日 (木)	島中小学校との合同授業(松岡教諭) 3・4年「俳句を作ろう」 2校児童10名 参観者約10名	コラボノート 児童作品
2月15日 (木)	I C T活用に関わるアンケート調査	アンケート用紙 アンケート集計
3月17日 (土)	学校情報化システム入力	ウェブ上
2月～ 3月	研究のまとめ	研修綴り

4. 代表的な実践

ICTを活用した「俳句づくり」（「合同授業」1h＋「ウェブ句会」2h）

本校と隣の小学校三・四年生十名による実践である。（周防大島町立島中小学校）

（1）合同授業

集合学習の際に、国語の合同授業を一時間計画した。

大型テレビを使ってテンポよく授業を進めた。

①俳句って何（世界一短い定型詩）

- ・五・七・五
- ・季語

②友だちの俳句の紹介

県児童文集「あくしゅ」の中から、数句を紹介した。

③ 作り方

- ・穴埋め俳句（自分にしかできない表現）

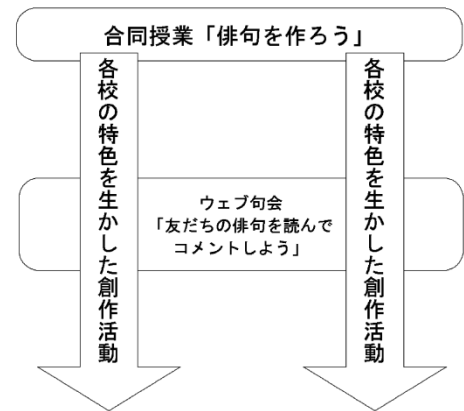
④ 作ってみよう

できた児童からどんどん持ってこさせる。他校の児童と競うように次々と作品が完成した。できた俳句はどんどん黒板に書いてもらった。

好きな句を選んでコメントを言わせた。

コメントは、どんなところが〇〇さんらしくて素敵かということを考えさせた。また、もっとこうしたらいいという気づきもあれば、言ってもらった。

これからも継続して作って、できた作品を交流しようと授業を終えた。



（2）各校の特色を生かした創作活動

本校では、合同授業後に、日記などで継続的に創作する活動を続けた。また、実際に校庭を周りながら五感で季節を感じたり、季語見つけをしたりして、季節感を味わい創作を行った。特に、本校は海辺にあり、海を題材とした俳句をつくる児童が多い。

（3）ウェブ句会

①作品の入力

作品の中で特に友だちに読んで欲しいものを、各自でMyタブレットを使って入力した。使ったアプリは「コラボノート」（JR四国コムウェア）である。

「コラボノート」は、子どもたちの「学びあい」を支援するネットワークソフトウェアであり、シートに付箋を貼り付けて、自由に意見や感想が書けるシステムになっている。町内の全ての小中学校に導入されている。

児童は、隣の学校の友だちを意識しながら、自分の自信作を入力していた。ローマ字が苦手な児童も、ローマ字表を活用して入力していた。どんなコメントが返ってくるかとても楽しみに待っていた。

②コメントの記入

友だちの作品を読んで、コメントを記入する。

「その俳句のどんなところが素敵か」「どんなところにその人らしさが表れているか」を返してあげようと声かけをした。

メール等の扱いに慣れている児童も多く、楽しみながら入力を行っていた。

(4) 推敲

A児は初めに次の作品を創作した。

氷張るワクワク始まる冬の朝

(伝えたいこと) 学校に行こうとして、車を見て、氷が張っていたので冬だなあと思いました。(友だちからのウェブ上でのコメント)

B児「氷が張っていてうれしい気持ちが俳句に表れているのでいいと思います。」

C児「学校へ行くのが楽しみなのかなあ。」

D児「〇〇さんらしい元気な俳句だと思います。」

B児のコメントは、ワクワクという言葉に着目したコメントである。

C児のものは、さらに筆者の気持ちを掘り下げて推測した読みである。

D児の感想は、作者と重ね合わせた読みである。これが場の文芸としての俳句のおもしろさの一つである。

これらのコメントを読んで、A児は次のように修正した。

氷張るワクワク始まる通学路

「氷」と「冬の朝」は、季重なりである。

Bのコメントを参考にして、「冬の朝」を「通学路」と代え、登校中の様子と限定した。そのことによりその場の情景を明確にし、心情を強調することができた。他者とのかかわりによって、自分の言葉を吟味し、修正をすることができた。推敲後も、さらにウェブ上で交流をする児童の姿も見られた。

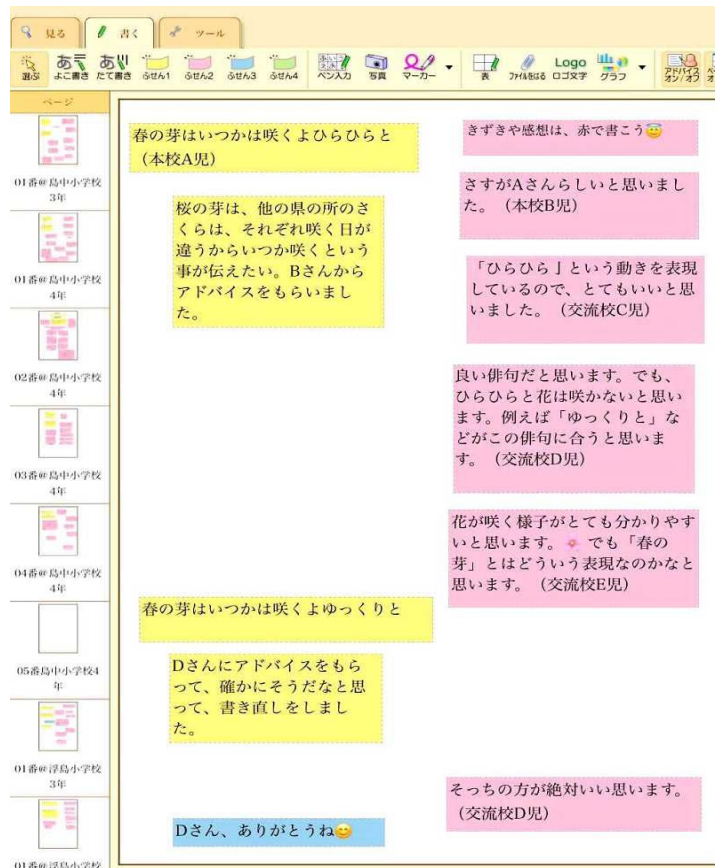
5. 研究の成果

(1) 児童の学力の向上

日常的にタブレットを活用して学習する姿が見られるようになった。タブレットの保管場所が職員室から教室へと移動し、Myタブレットを活用したい時にすぐに使えるよう整備されたことが大きい。

板書や実験の様子をMyタブレットで撮影して記録し、授業に生かそうとする児童も表れた。また、漢字や計算のドリル学習についてタブレットを授業やチャレンジタイムで実施することにより、集中して学習に取り組む児童の姿も確かめることができた。

特に、高学年の児童は、1月の学習発表会で、総合的な学習の成果についてMyタブレットを活用して地域の方に向けてプレゼンテーションした。また、2月の参観日においても、社会科の調べ学習の成果を保護者の前で自信をもって発表することができた。このように継続してICTを活用することにより、情報収集や、プレゼンテーション資料作成のスキルを高学年児童は身につけることができた。



また、低学年の児童は、漢字練習やたしざんひきざんの計算問題をMyタブレットを使って継続して行っている。
（「ひまわりポケット デジ漢 デジ計」 光文書院）

そして、中学年の児童は、代表的な実践事例に挙げたように、集合学習や合同学習で他校の児童とICTを活用して交流する機会をもった。

4月と10月に実施した山口県学力定着状況確認問題の分析によると、残念なことにポイントに顕著な伸びは見られなかった。



しかしながら、町教委が行った「ICT教育に関するアンケート調査」の児童のアンケートによると次のような項目の数値が向上していた。（9月）→（2月）

- ・コンピュータやタブレットを使った学習をもっと受けたいと思いますか。
- ・コンピュータを使って発表したいと思いますか。
- ・友だちがコンピュータやタブレットを使って発表するのを聞きたいと思いますか。

また、学習全般についても次の項目に、若干の数値の向上が見られた。

- ・自分の考えや意見をわかりやすく伝えることができていると思いますか。

ICTの活用が、児童の表現力やコミュニケーション能力の向上に寄与した可能性が考えられる。

（2）町内各校への研究内容の普及

KS学習（久賀・橘地区集合学習）、合同学習でのICTを活用した研究授業を行った。

KS学習では、タブレットで写真を撮影して俳句を実作することに取り組んだ。また、合同学習では、他校の児童と感想交流を行い俳句の作品を推敲することに取り組んだ。

どちらも、授業研究を通じたICT活用方法の提案について、参観した先生方から肯定的な感想をいただいた。しかしながら、参観の数が限定的で（集合学習：約20名、合同学習：約10名）研究内容の量的な波及という点においては、やや不足していると感じている。

（3）職員のICTを活用した授業力の向上

日常的にタブレットや大型テレビを活用して授業をする様子が見られるようになった。大型テレビ・Myタブレットとも稼働率が上昇している。それらの変化は、タブレットの保管場所が職員室から教室へと移動し、活用したい時にすぐに使えるよう整備されたことが大きい。

また、ICT機器の整備の他に次のことによる影響も挙げることができる。

- ① 先進校視察や講師を招聘した研究授業の実施により、ICT機器の利便性と具体的な活用法に触れることができ活用場面が増えていった。（研究授業4回・研究視察2校）
- ② 職員の実践意欲の高まりにより、自費で自分用のタブレットを購入し活用する職員が増えた。（自費でタブレットを購入した職員 6名中4名）

ICTを活用した授業力の向上については、「授業で使う教材や資料などを集めるために、インターネットやデジタル教材などを活用することができる。」「授業に必要なプリントや提示資料を作成するために、ワープロソフトやプレゼーションソフトなどを活用することができる。」等についてアンケートでポイントの上昇を確かめることができた。（町教委「ICT教育に関するアンケート調査」9月→2月）

また、3月に行った学校情報化診断システムの入力においても、教科指導におけるICT活用の項目が1.8→2.8と大きく伸びていることでも確かめることができた。

6. 今後の課題・展望

計画的に児童のICT活用能力を育成していくことの重要性に気づくことができた。ICT機器を活用した授業づくりについて、これからも全校で組織的に取り組んでいきたい。また、個別の教育的ニーズに対するICTを活用した支援も本校では重要なテーマである。今年度取り組んだ他校との交流をより一層進め、児童の学びの向上と研究内容の普及を進めていきたい。

7. おわりに

今回の研究助成を受けて、ICT環境が整備され実践の基盤が整うとともに、研究主題に向けて職員が一丸となって取り組むことができた。そして、今回の研究により本校の教育課題がより明確になり、ICT活用を通して目指す方向性を確かめることができたことも大きな成果である。

また、このたびの実践を通して、多くの研究者や実践者の方々と知り合い、情報交換ができたことにより、多くの知見を得ることができた。そればかりでなく、小さな島の実践に対して自信をもって推進していけるよう勇気をいただいたことに尽くしがたい感謝の気持ちを感じている。

8. 参考文献

- ・山口県児童文集「あくしゅ」
- ・コラボノート活用事例集（ジェイアール四国コミュニケーションウェア）